

農家と他者との交流に着目した農村景観保全に関する研究

熊本大学工学部 学生会員 ○御手洗広大

熊本大学政創研 正会員 田中尚人

1. はじめに^{1), 2)}

近年、土地利用の乱れや農村部の高齢化により日本の農村景観は失われつつある。農村景観は人々と自然の持続的な関係性により形成されてきた景観であることから、農村景観を保全していくには、農村地域の人々が地域の景観を認識し、その地域特有の農村景観を自覚的に守っていくことが必要であるといえる。そのため、農村地域の人々が、自分たちの生業（営農）と農村景観保全の関係性を理解する必要がある、そのプロセスを解明することは農村景観保全において重要な要素であるといえる。

本研究では、山鹿市番所地区、山都町白糸台地、美里町小崎地区の3地域を対象に、農家が営農と農村景観保全の関係性を理解するプロセスを明らかにすることを目的とする。



写真-1 山鹿市の農村景観



写真-2 山都町の農村景観

2. 農村景観保全のモデル化

本章では、既往研究を整理し、農村景観保全における重要な要素を抽出して、農村景観保全のモデル化を行う。



写真-3 美里町の農村景観

(1) 農村景観保全に関する論文の整理

農村景観保全に関する研究は、様々な視点に着目したものがある。恵谷らは農村地域における住民の景観形成意識に着目し、住民の農村景観における景観形成行動への心理的規定要因を明らかにしている。

(2) 農村景観保全モデルの作成³⁾

本研究では、恵谷らの研究に着目し、農家の「営農と農村景観保全の関係性」の理解をモデル化する。恵谷らによれば、農地における住民の景観形成行動には継承するという意識が強く影響しており、それには愛着や相互関係性などが間接的に影響していることが明

らかにされている。つまり、他者との交流により、農家の農地への愛着や継承するという意識が刺激され、農家が農村景観を認識することで景観形成行動をとっていることが分かる。また、それまで生産の場として捉えていた農地を農村景観の要素として認識し、自分たちがその景観の作り手になっていると意識することで、自らの営農と農村景観保全との関係性を理解しているといえる。



図-1 農家の農村景観の認識

図-2 農家の農村景観の認識

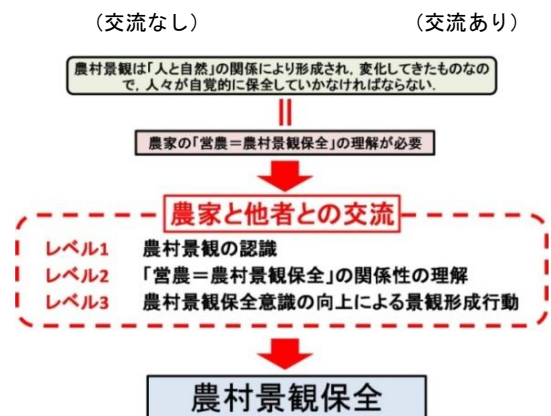


図-3 農村景観保全フロー

(3) 調査方法について

本研究では、山鹿市番所地区、山都町白糸台地、美里町小崎地区の農村景観保全の状況を知るために、行政職員に対してヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査では、各地域における「農家と他者との交流」、「農家の農村景観に対する認識と変化」、「農家の農村景観保全への意識」を明らかにすることを目的として「農村景観保全政策実施前の状況について」、「農村景観保全政策実施中の状況について」、「農村景観保全政策実施後の状況について」の3つの項目を設けた。ヒアリング調査は、平成26年12月5日に山鹿市農業振興課職員、平成26年12月18日に山都町農業振興課職員、美里町農業振興課職員に対して実施した。

表-1 ヒアリング調査結果まとめ

地域		山鹿市番所地区 農村景観保全政策：景観農振	山都町白糸台地 農村景観保全政策：景観農振	美里町小崎地区 農村景観保全政策：なし
状況				
実施前	農家と他者との交流	元々、棚田を目当ての来訪者との交流があった。景観計画や地域づくり計画をきっかけに行政との交流も多かった。	来訪者の多くが通瀬橋目当てであったため、交流は少なかった。しかし、重要文化的景観選定により、来訪者や行政との交流が増える。	小崎の棚田を求めて写真撮影をしに来る来訪者がいたが、会話などは特になく、農家と他者との交流は少なかった。
	農家の農村景観に対する認識と変化	日本棚田百選に選定されるなど、昔から番所の棚田の評判が高かったことから、元々、農家の農村景観に対する認識があった。	重要文化的景観選定段階での行政による景観への説明や祝賀会をきっかけに農家の農村景観に対する認識が生まれた。	清掃活動や町花町木の植樹活動が活発に行われていたため景観に対する認識はあった。しかし、農村景観については、「農村景観＝田舎」という認識だった。
	農家の農村景観保全への意識	地区の住民を構成員とする「きらり」の活動で、棚田の彼岸花の手入れが行われるなど、元々農家の農村景観保全への意識は高かった。	重要文化的景観選定や、その祝賀会により、農家に「営農＝農村景観保全」の意識が生まれ、農地の手入れが丁寧に行われるなど、保全への意識は高かった。	町全体でもこれまで農村景観を保全するための政策はなく、農家の農村景観保全への意識は低かった。
実施中	農家と他者との交流	景観農振策定段階での説明会やWSなど行政との交流は若干増えるものの、特に実施前との変化はなかった。	景観農振に関連したWSや集落ビジョンづくり関連のWSが行われるようになるが、特に実施前との変化はなかった。	美里町でフットパスが始まり、フットパスコースづくりを通して、美里フットパス協会や行政との交流が増える。
	農家の農村景観に対する認識と変化	特に実施前との変化はなかった。景観農振策定においては、WSをほとんど実施する必要がなく、計画策定がスムーズに進んだ。	特に実施前との変化はなかった。認識に変化はなかったものの、集落で集まって話す機会が増えたり、集落の将来像について話す機会が増えた。	フットパスコースづくりを通して、地域の魅力として農村景観が取り上げられたことで、農家の農村景観に対する認識が変化し始める。
	農家の農村景観保全への意識	特に実施前との変化はなかった。農家の農村景観保全への意識が高かったことから、景観農振の周知が短期間で完了し、計画への参加も多かった。	特に実施前との変化はなかった。一方で、棚田景観プロジェクト会議と棚田サミット実行委員会が発足するなど、農村景観保全への取組みが活発になる。	特に実施前との変化はなかった。一部では、フットパスコースを自主的に整備する動きが出てくる。
実施後	農家と他者との交流	特に実施前との変化はなかった。景観農振が策定されたことにより、行政とのやり取りが増える。	棚田サミット、収穫祭、棚田ウォーキングが開催され、農家がイベントの運営に携わる機会も増えたため、農家と来訪者との交流が増える。	地区全体で農家と他者との交流が増える。年に数回開催されるフットパスイベントの参加者や、個人的に歩きに来る来訪者との交流が始まる。
	農家の農村景観に対する認識と変化	現段階では、実施前との変化は特にない。	現段階では、実施前との変化は特にない。	フットパス参加者からの農村景観への評判から、農家の農村景観への認識が「農村景観＝魅力的なもの」に変化。
	農家の農村景観保全への意識	現段階では、実施前との変化は特にない。地域住民にとって景観農振は「自分たちが今までやってきたことを文字にただけ」という認識。	景観農振による米のブランド化により、棚田景観の重要性が共有され、棚田景観プロジェクトに青年部が出来るなど、農村景観保全への意識は向上している。	来訪者にとって農村景観が魅力的なものになっているという認識から、農地の手入れが始まるなど農家の農村景観保全への意識は高まっている。

3. ヒアリング調査結果のまとめ

本章では、ヒアリング調査結果から明らかとなった各地域における「農家と他者との交流」、「農家の農村景観に対する認識と変化」、「農家の農村景観保全への意識」についてまとめる。

(1) 山鹿市番所地区

番所地区の農家には番所の棚田の評判による来訪者や、景観計画などの計画策定段階での行政との交流があり、番所の農村景観が良いものという認識があった。また、元々、棚田に咲く彼岸花の手入れや、地区の住民を構成員とする「きらり」の活動があり、農家が農村景観保全活動に参加していた。農村景観保全政策をしたことによる変化は少なかった。

(2) 山都町白糸台地

山都町白糸台地には多くの来訪者が訪れていたが、農家との交流は少なかった。しかし、重要文化的景観選定や棚田サミットなどにより交流は次第に増え、農村景観に対する認識も生まれていた。景観農振策定後の米のブランド化により、棚田の維持の重要性が意識されるようになり、農家の農村景観保全意識は徐々に高くなっている。

(3) 美里町小崎地区

美里町小崎地区では、これまで農村景観保全政策を実施したことがなく、農家と他者との交流も少なかった。しかし、フットパス事業をきっかけに交流が増え、農家の農村景観に対する認識も「農村景観＝田舎」から「農村景観＝魅力的なもの」という認識に変わった。また、農地の手入れを協力して行うなどの動きが出てきており、農家の農村景観保全への意識は高まっているといえる。

4. おわりに

農家の農村景観に対する認識や保全への意識には、他者との交流が大きく影響していることが分かった。

[謝辞]最後にヒアリング調査に協力して頂いた熊本県庁、山鹿市役所、山都町役場、美里町役場の方々に深く感謝を申し上げます。

[参考文献]1) 農業農村整備事業における景観配慮の手引き、2006

2) 横張真、渡部陽介:農山村における文化的景観の動態保全、ランドスケープ研究 73(1), pp10-13, 2009 3) 恵谷浩子、村松真、麻生恵:農村地域における景観形成に関わる住民の認識と行動の構造化、ランドスケープ研究 70(5), pp575-578, 2007